魔鏡古伝 鏡遊部社縁起

木上ゆうらり

青山ライフ出版

エピロ				第二部				第一部
ーグもう一枚の鏡	第六の鏡	第五の鏡	第四の鏡	日曜日	第三の鏡	第二の鏡	第一の鏡	土曜日
231	200	164	130	121	84	50	24	7



魔鏡古伝

鏡造部社縁起

第一部

土曜日

その日、珠美の勤める病院へ行ってみようと思ったのは、私の耳の中で、カラカラとい

う音がするのを聞いたからでした。

煎 私は、病院へ向かいながら、耳鼻科医となった珠美をいろいろ想像してみましたが、以 神社で見た巫女姿の珠美と、女医さんになった珠美は、私の頭の中でうまく一致して

くれませんでした。そう言えば、どちらも白衣を着ているのですが。

びに行きました。珠美はいつも優しくて、一人っ子だった私は彼女が本当のお姉さんだっ 珠美は、ずっと小さい頃から私の憧れ、三歳上の従姉でした。私は、従姉の所へよく遊

方……庭の花の蜜を吸うことも、みんな珠美から教わりました。 珠美はいろんな事を教えてくれました。折り紙のあやめの折り方、毛糸のミトンの編み

たら良かったのにと思っていました。

珠美は、小学生の頃には、リカちゃん人形のようでした。 お洒落で手足が長くて。

それから私立の女子中学に入ると、長く伸ばした髪を真っ直ぐ垂らして、白いブラウス

と昔から変わらぬグレーの制服が似合う清楚な女子校生になりました。

私は、どうしても珠美と同じ学校に入りたくなって、一所懸命勉強しました。努力の甲

部の華、 斐あって、どうやら珠美と同じ制服を着ることができ、嬉しくて鏡の前に立ったのですが、 その鏡に映った私の姿は、あまりに珠美とは違っていてがっかりしてしまいました。 るのは私の従姉なのよ! と、自慢して回りたいくらいでした。 それから後、珠美は大学生になると、さなぎを脱いだ蝶のように華やかで垢抜けた大人 文化祭では常にヒロインを演じ、私は得意でした。あのオフィーリアを演ってい 相変わらず珠美は私の憧れ、私の誇りでした。成績も優秀、クラブ活動では演劇

l; になってしまって、私は少し寂しく思っていました。珠美は、いつになっても追いつけな 珠美は医大に入りましたが、私は、やっと珠美の真似をやめて分相応の女子大に入り、 それでいて私を呼んで止まない、不思議な魅力を持った従姉でした。

やがて、珠美は耳鼻科医になったのです。珠美は、母親を早くに亡くしていて、母方の祖

父母に育てられました。私は事情をあまりよく知らないのですが、珠美の父親は今でも生 きていて医師であるらしいことを、 小さい頃、大人たちの会話の中で聞きました。

は封鎖されていて、外部の人がお参りすることはできないようになっていましたが、祖父 という古ぼけた額が掛かっていて、影見姫命を祭るということが書かれてありました。今 祖父母の家の裏には小さな山があり、登っていくと小さな神社があります。「鏡造部社

一部

土曜日

母たちは、掃除をしたりお供え物をすることを欠かしませんでした。珠美は、神事につい

ても色々と教わっていたようです。

ると言われて、 私が高校生の頃でしたでしょうか、ある日のこと、遊びに行くと、珠美は神社の方にい おっかなびっくり山に登ってみました。私は、その裏山の神社があまり好

ような気がして怖かったのです。 か、とてもとても古くて、神さまというより、何か私の知らない未知のものが棲んでいる

した。その鳥居を次々とくぐりながら登っていくと、上のほうから、シャンシャンシャン 参道には、上に行くほど順々に古くなり色の褪めていく幾つもの赤い鳥居が続いていま

と、鈴の音が聞こえてきました。

らいの歳に見えるその人は、珠美と、両掌をぴったりくっつけ合って、静かに座っていま した。祝詞と言うのでしょうか、珠美の、何か呪文を唱えるような声だけが、高く低く聞 に水色の袴を着けた珠美が座っていて、向かい側には男の人が見えました。珠美と同

こえてきます。私は見てはならぬものを見てしまったような気がしました。

きではありませんでした。大きな木々の鬱蒼と繁った山の中の神社は、いつ建てられたの 社の前まで来ると、いつもは閉まっている扉が開け放たれており、中を覗くと、 白装束

その男の人は晴巳さんと言って、珠美の大学の同級生ということでしたが、その後も珠

私と同じように珠美に惹かれていたからだと思います。でも、ライバルが珠美では……と、 美の家で度々会うことがあり、私の初恋の人となりました。それは、きっと、晴巳さんが、

珠美は、私には神社の事をあまり教えてくれませんでした。私が怖がっていたのを知っ

私は初めから諦めていました。

か足は遠のいていたのです。 して寂しく感じていました。その頃から何となく珠美の所へ行くことが減り、いつのまに ていたからかもしれません。でも、私は、珠美が少しずつ遠い人になっていくような気が

だから、珠美と会うのはずいぶん久しぶりでした。

病院は、清潔で感じのいい総合病院でした。

た。 もう、 外来診療は終わっていましたが、受付で珠美の名を告げると呼び出してくれまし

珠美は白衣がとても似合って、そのお医者ぶりに、私は、喋るのを一瞬忘れてしまって

見惚れていました。

11

「どうしたの?」

小さな穴から私の耳を真面目な様子で覗き込みました。それから、「何でもないわね」と くれました。そして、頭につけた丸い反射鏡を顔の前に下ろし、その鏡の真ん中に開いた 耳の中で、カラカラと音がしたの、と言うと、珠美は、耳鼻科の診察室に連れて行って

優しく微笑むと、珠美が昔の従姉に戻ったようで嬉しくなりました。

私は、さっきから気になっていた、珠美の頭につけた丸い反射鏡を指差して、「これで、

耳の中が見えるの?」と、尋ねました。

この真ん中の孔から覗くのよ」 「そう。額帯鏡と言って、こっちの照明の光をこの凹面鏡で集めて、耳の奥を照らして、

射を利用して、外の光を中に入れて壁を明るくするのよね」 「ピラミッドの中の壁画を描くのに、鏡を使ったというのを聞いたことがあるわ。鏡の反

その話も、 もしかしたら、珠美から聞いたのかもしれませんでしたが、「そうね、その

頃のエジプトにはもう鏡があったのねえ」と、珠美は、少し夢見るような遠い目で呟きま

それから、珠美は私を医局へ連れて行きましたが、医局というのは、ずいぶん雑然とし

た所でした。スチールの机がいっぱい並んでいて、その上には、本や灰皿、ハワイや地方 の土産物、お菓子の袋や出前の丼、白衣や聴診器、あらゆるものが積み上げられていて、

ここで勉強するのはとても無理だと思いました。病院の中でここが一番汚いのではないか

書、病理学、耳鼻科臨床といった学術書の並ぶ中から、一冊の本を抜き取り、私に見せて 珠美の机の上には、本がたくさんありました。珠美は、頭頚部解剖学、耳鼻咽喉科手術

それは、正倉院御物の写真集でした。

くれました。

ある古鏡は皆、錆びて化石のようになってしまった古ぼけた固まりばかりでしたが、この 宝物の写真の中には、古鏡がたくさんありました。私が実際に博物館などで見たことの

本にはつい最近造られたような美しい鏡の写真がたくさん並んでいました。 もう鏡面は

濁ってしまっているのでしょうが、裏側の装飾の多様さには驚かされました。

「平螺鈿鳥獣花文円鏡」巻貝の真珠のような光沢を使った螺鈿や、赤い琥珀、 黄色い玳瑁、 13 第

一部 土曜日

緑色の孔雀石などが、鳥や鹿、花の模様を描き出しています。

「金銀平脱花鳥文八花鏡」八枚の花弁状の鏡に、花や鳥の形に切り抜いた金箔や銀箔を、

「銀貼鍍金山水文八稜鏡」八角形の銅鏡に銀板を重ね、 文様を線刻してから、 金色の模様

「瑠璃螺背十二稜鏡」銀の鏡に金線で十二枚の葉の形を象り、黄色、淡緑、濃緑の鉛ガラ

スを溶着した七宝細工。

を鍍金したもの。

漆で貼り付けたもの。

たらしい文様のものもありました。 その他、 海獣葡萄鏡のような獅子や葡萄唐草文などの、西域からシルクロードを経てき

うに思いました。どんな人たちがその鏡に顔を映していたのでしょう。 きているかのようでした。まるで、それらの鏡を使っていた人々の息遣いが聞こえてきそ その古い鏡たちは、そのように長い時を経てきていながら未だ輝きを失わず、まるで生

ました。「ほら、この海磯文円鏡なんかは、鏡のふちから中心へ向かってぐるりと海や岩、 「でもね、全部の鏡が中国や西域から来たものというわけではないのよ」と、珠美は言い

う、青銅鏡を造る技術が伝わっていたのよ」 船の風景画がレリーフされているの。題材も雰囲気も日本的でしょう? 奈良時代にはも

「遣唐使ね?」

たちも海を越えて日本へやってきたのね。うちの裏にある神社の名まえを知っているで しょう?」 「そう。色々な専門の技術を学ぶための留学生たちが、鏡を造る技術を伝えたし、技術者

そう言われて、初めて思い出しました。

「あら、鏡造部社だわ」

た鏡なのよ。みどりも見てみない?」 「そうなの。そして、六枚の銅鏡が祭られているのよ。今でも家にあるわ。とても変わっ

そんな鏡のことは、初めて聞きました。

珠美は、祖父母から、神社の縁起や神さまを祭るしきたりの他に、私には想像もできな

見たせいかもしれません。 が、その六枚の鏡には興味がありました。見てみたいと思いました。正倉院の鏡の写真を い何か不思議なことや大切な秘密を伝えてもらったのでしょうか。少し恐い気もしました

第一部 土曜日